

2014.1
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

1 号

第36巻
No.294



フクジュソウ *Adonis ramosa* Franch. (キンボウゲ科 *Ranunculaceae*)

生薬

フクジュソウコン（福寿草根） 地上部が枯れる8月頃に掘取り、地上部を取り除いてから適な大きさに株を分割し、水洗後陽乾する。

成分

強心配糖体：cymarine, cymarol, adonitoxin, convallatoxin, strophanthin 等。

効能

強心・利尿薬として利用されたことがあるが毒性が強く現在では使いません。



生薬 フクジュソウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇

江戸時代、世の中が安定した延宝年間に発行された園芸書『花壇綱目』（1681）に福寿草の名が最初に表れます。「福寿草、花黄色小輪なり、正月頃より花咲く、元日草とも朔日草とも福つく草とも俗にいう」とあり、続いて施肥や株分けの時期などが記されていることから、すでに正月を飾る花として定着していたようです。それから180年後の『本草要正』（1862）には126品種を数え、古典園芸植物として確固とした地位を占めていたと思われますが、現在では42品種が確認されるだけになりました。また、確実に新正月に咲かせるため、「ふかし」という促成栽培が行われています。晩秋から12月初めに掘り上げ、鉢に移し、昼は25℃、夜は15℃くらいのハウスに取りこみ育てたものが暮れに店頭に並びます。

野生のものは雪の間から茎を伸ばし、茎頂に鮮やかな黄色の花を、日差しがあたると開き、日が沈むと閉じます。10℃で開花が始まり、20℃で完全に開き、暗い中でも温度が上がると開くため冬の室内の飾り物としては最適です。上を向いてパラボラ状に開く黄色花には理由があります。パラボラを日の光の方向に向け、太陽の光を集め、中心部の温度を5～6℃上げるといわれています。密を作らない花としては、低温の中でわずかに活動している虫に暖を与えることにより虫を集め、受粉してもらおうとの健気な知恵と思われます。

以前は国内に自生する福寿草は1種とされていましたが、染色体数や外部形態の違いからキタミフクジュソウ (*A. amurensis*)、ミチノクフクジュソウ (*A. multiflora*)、シコクフクジュソウ (*A. shikokuensis*) の3種が加えられ、4種に分類されています。ヨーロッパからシベリアに分布するヨウシュフクジュソウ (*A. vernalis*) も園芸用に栽培されています。

(村上守一 記)

行政からのお知らせ

「薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 平成24年年報」

富山県厚生部くすり政策課長より次のとおりお知らせがありました。公益財団法人日本医療機能評価機構ホームページ (<http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/>) に「薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 平成24年年報」が掲載されていますので、業務の参考にご活用くださるようお願いいたします。